

事務局便り

令和6年12月10日



—令和6年度春期研修会 ハイフレックス型開催のご案内—

春期研修会の詳細が同封のチラシのように決まりました！

倉持清美先生と研修内容の検討をしているとき、「子どもの養護性ばかりに目が行って、主体性が注目されていない」というお話が出て、ドキッとしました。自分の子育てで子どもの主体性を尊重していなかったのではないかと考えたからです。子どもの権利を尊重する保育学習をどのように展開するか？一緒に考えてみませんか？年度末のお忙しい時期ではありますが、多くの先生方のご参加をお待ちしております！

テーマ：今 保育学習で育てたい力

講師：東京学芸大学 教授 倉持清美先生

令和7年3月27日（木） 10:00～16:00

会場：家庭クラブ会館2階 オンライン：Zoom



—令和7年度 第75回研究大会 研修会（小中高合同）講師決定—

次年度の研究大会は、以下の日程で開催いたします。例年は、校種別研修会を小・中学校部会と高等学校部会に分かれて行っておりましたが、次年度は、合同で行うことと致しました。そして講師とテーマは以下のようにになりました。なお、1日目が研修会です！

講師：茨城大学教育学部 野中美津枝先生

タイトル：「未来を拓く力を育む家庭科の授業開発」（仮）

野中先生から、「生活課題解決能力の育成や、知識構成型ジグソー法の教材開発なども盛り込みつつ、今日的な話題から授業開発の演習に繋がられると良いかなと思っています。」とお言葉をいただき、準備が進んでおります。まだ先ではありますが、スケジュールに「ZKK 研究大会」と入れておいて、是非ご参加ください！

開催日：令和7年8月5日（火） 6日（水）の2日間

方法：ハイフレックス型開催 会場：家庭クラブ会館2階（予定）

日程：5日（火）午前-小中学校及び高等学校の研究発表・講評

午後-研修会（小中高合同）

6日（水）午前-小中高関連の研究発表・講評 昼休み-理事会

午後-総会、講演

—令和9年度第77回研究大会 研究発表者募集！—



ZKKの新たな取り組みとして、3年後の第77回研究大会から、研究発表者を公募することと致しました。自分のやってみたい授業実践研究を2年間かけて行い、その成果を研究大会で発表してみませんか？なお、毎年研究発表者には、ライオン賞として資料代一人6万円程度のお渡しもありますので、ご応募をご検討ください！詳細は、同封のチラシをご覧ください！（なお、第76回までの発表者は本年度の総会で承認され、すでにご準備を始めていただいております。）

—ZKK 機関誌家庭科 4号 編集後記—

年間テーマも「今だから家庭科」そして4号テーマも「家庭科への期待」と、ちょっとうさいくらい「家庭科」について特集しております！アクティブラーニングを提唱された元文科副大臣の鈴木寛氏に、元気の出る原稿をお寄せいただきました。わかりやすく家庭科教育への5つの期待が書かれています。生活史研究家の阿古真理氏には「家庭科は、重要な科目である」と言い切っていただきました。新たな教育の流れの中で期待される家庭科教育であることに誇りと自信をもって日々の教育活動を行いましょう！

*ZKK 機関誌家庭科をお読みになつての感想やご意見などを事務局までお寄せください！

—ZKK をはじめとする家庭科教育関係団体の要望書提出について—

令和6年7月4日、ZKK ホームページにてお知らせした「要望書」を ZKK 機関誌家庭科 3号の巻末に掲載いたしました。同様に日本家庭科教育学会は7月26日に、生活やものづくりの学びネットワークは9月28日に要望書を HP に公表、関係者に送付等されました。

これは、2号の事務局便りに掲載した通り、新聞報道もあった日本産業技術教育学会が技術・家庭科技術分野を再編して「テクノロジー科」を要望したことに関係しています。また、文部科学省も GIGA スクール構想に関連し技術分野の研修を重視するなど、家庭科教育への影響が心配されるからです。学習指導要領の改訂が始まろうとしている今、中央教育審議会の動きについて注視する必要があります。

シリーズ～全国家庭科教育協会の歴史～ (5) 技術・家庭科の成立まで ③ZKK 会長の存在 石山脩平先生 と 石三次郎先生

前号では、教育課程審議会の答申で「技術科」という教科名となることが発表されてから、すぐに日本家政学会、日本教育大学協会第二部家庭科部門と ZKK が一緒になって請願書を提出、そして1958年3月末の総会記録で「中学校家庭科の名称が継続される見込みがあった」⁽¹⁾と公表されたことを紹介した。そのように早く「見込み」を確認できた理由は何だろうか？一つの理由として、ZKK 会長の存在が関係していると考えられる。

当時の ZKK 会長は、1958年3月までが石山脩平氏（東京教育大学教授文学博士）、1958年4月からは石三次郎氏（東京教育大学教育学部長）である。石山氏は、その当時教育課程審議会委員であったが、「家庭科の審議にさしかかったころ、(中略)、ついに療養生活を余儀なくさせられた。」とあり、残念なことに家庭科の審議に加わっていない⁽²⁾。しかし、石山氏からの推薦で次期の ZKK 会長となった石氏は、元教育課程審議会中等教育教育課程分科審議会会長であり、昭和23年～24年に終戦後の教育課程における家庭科について論議していた経験があった⁽³⁾。そして、当時の理事長である大山サカエ氏が「会長石三次郎先生も御自身で文部省その他にお出かけ下さいました。」と技術・家庭科成立までの流れを述べている⁽⁴⁾。日本家政学会や大学の教授の方々他のご尽力もあった⁽⁴⁾ようだが、ZKK では、会長を先頭として、中学校の「家庭科」の教科名を残す活動をしたと思われる。

(1) 機関誌「家庭科」No81-82 昭和33(1958)年5月15日発行 p8

(2) 機関誌「家庭科」No81-82 昭和33(1958)年5月15日発行 p3

(3) 機関誌「家庭科」No81-82 昭和33(1958)年5月15日発行 p1

(4) 機関誌「家庭科」No81-82 昭和33(1958)年9月15日発行 p14

